神林長平

Uの世界

The World of U
Chōhei Kanbayashi

の世界

神林長平

Uの世界

著者／神林長平

1989年3月31日　第1刷

発行者／荒井　修

発行所／株式会社徳間書店

郵便番号105/東京都港区新橋4－10－1
電話 東京(433)6231 代表／振替東京4－44392
印刷所／長苗印刷㈱
カバー印刷／真生印刷㈱
製本所／ナショナル製本

定価は帯・カバーに表示してあります。
© Chôhei Kanbayashi 1989
乱丁・落丁本は本社またはお買い求めの書店にてお取り替えいたします。
〈編集担当　渋谷康人〉　Printed in Japan

ISBN4-19-123911-2

Uは

UNIVERSE

宇宙のウ

YOU ユウ あなた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Uの世界／目次

烏(う) 127

独(う) 99

移(うつり) 55

虚(うつ) 9

有(ゆう)

活(ど)

舞(まい)

蟬(せみ)

熟寝(うまい) 169
醞醸(うんじょう) 211
あとがき 250

カバーイラスト　門坂　流

ブックデザイン　矢島高光

Uの世界

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

虚蟬

うつせみ

このごろとても体がだるい。少し貧血ぎみだ。医者はどこもわるくないっていってるけれど。

客が電球を欲しいといってる。どんな電球ですか、とわたしはきく。「ああ、それでしたら電球でなくて螢光管ですわ。三二ワットのサークル管。もしあわないようでしたらお取り換えいたします」

包装していると、若い店長がわたしの耳もとでささやく。今夜、どうだい。わたしは彼が嫌いではないのだけれど、男と女のなまぐさいこととなると苦手だ。彼にさりげなく髪を触れられただけでも嫌悪感が身を走る。彼だけじゃない、わたしは男には興味がもてない。店長はわたしの両親も認めている婚約者だからそんなことではいけないのだけれど。わたしはあいまいにうなずいている。拒む理由を思いつけなかったから。

はじめて彼に抱かれたとき、彼はわたしの心を知るはずもなく、そんなに緊張しなくていいと笑った。でもたびかさなるうちに彼もいらだってきたようだ。材木を抱いているようなものだろうな、とわたしは思う。わたしは演技ができるような器用な女じゃない。

今夜もわたしはいやいやホテルへ行く。

部屋にはいるなりいきなり背後から抱きすくめられ、胸をまさぐられる。うなじに彼の唇

が吸いつく。わたしは思わず彼の腕から逃れて、帰る、と口走っている。
「どうして？」
「……お爺さんのことが心配なの。最近ぐあいがわるいのよ」
「爺さんコンプレックスかい。カウンセラーにいちど診てもらったほうがいいんじゃないか。サイコかセックスのセラピストに」
「病気だっていうの、わたしを。不感症だっていいたいのね？」
「不感症っていうのは肉体的な病気なんだ。そうだったらたいへんだよ。だが本当の不感症患者なんてめったにいない。きみの場合は精神的なものだと思うな。なぜ爺さんにこだわるんだ。帰る口実なら母親を病気にしたほうがもっともらしいよ。お爺さんって、だれだ。いたのかい？　知らなかったな」
「父方の祖父なの。作家よ。売れないけれど。いまは海岸近くの倉庫番をやってるわ」
彼はベッドに腰をおろして煙草に火をつける。怒りをこらえて。
「ほんとにいるのかな。作家だって？　なら本を書いたんだな。こんど読ませてもらいたいものだ」
「幻想物語を書いているの。でも本にはならなかったわ。出版できなかったの。当局から差し取められたんだって。祖父はね、自分の書くのはみんな真実だっていうのよ。真実を市民に知られるのを当局はおそれている、だから出版できないのだ、そういうの」
「当局って警察のこと？　ここは自由世界だ。思想警察なんかない。きみのお爺さんも診て

もらう必要がありそうだな」

「そうね」わたしはあっさりと認める。「だから心配なのよ。ごめんなさいね」

彼の男の誇りを傷つけたくはなかったのだけれど、だめだったようだ。彼は返事をせず、もうわたしを見てもいなかった。わるいとは思う。でも、正直なところわたしはほっとしてドアから外へ出ている。さよなら、とわたしはいって、ドアをしめる。

祖父のことが心配だというのは、だけどほんとだった。わたしはお爺さんっ子といっていい。わたしは父や母よりも祖父に親しみを感じた。ずっと四人で暮らしていたのだが、四年前に祖父の病気がはじまった。奇妙な話を大真面目でわたしにきかせるようになった。

「いいかい優子」と祖父は十五のわたしにいった、「おまえは砂から生まれた。ある日わしは浜で、大昔に廃船になったらしい木造船のマストがにょっきり頭をのぞかせているのを見た。わしはせっせと掘ったよ。大きな船だった。とても全部を掘り出すことはできなかった。が、キャビンらしいものに掘りあたってな、そこでわしは赤ん坊の泣き声を聞いたんだ。信じられなかったね。だけど本当なんだ。その赤ん坊が、おまえさ」

祖父の話はおもしろかった。が、あくまでも物語としてのおもしろさだ。わたしは五つの子供ではなく十五の娘だった。現実と幻想の区別はわきまえていた。しかし祖父はそうではなかった。あくまでも真実だと言いはった。父は父の父親をわたしから遠ざけた。追い出したのだ。家から出るか、それとも入院するか、どちらがいいかといって。わたしは祖父がまともではないことを認めてはいたが、だからといって祖父に嫌悪感を抱かなかった。息子に

見捨てられて追い出された老人をわたしは憐れんだ。わたしは暇を見つけては、両親に内緒で祖父に会いにいった。祖父はわたしに語るかわりに物語を書くようになった。とてもおもしろいのに。売れないなんて、悲しいことだ。たぶん、人人はこんな幻想小説を求めてはいないのだ。それに祖父はあまり文章がうまくなかった。祖父に語りきかせてもらっていたわたしにはそのイメージが鮮かにうかぶのだが、小説という形ではぎくしゃくとした文章が内容をぶちこわしていた。小説というより哲学論文みたいだった。

「優子、地球は廃星だ」と祖父は会いにきた孫娘に真剣にいうのだ。「わしらは、見捨てられた惑星に生きている。よく見るんだ。海は偽物だ。海はない。はてしなく砂漠がつづいているだけだ」

そんな話をわたしは熱心にうなずきながら聴いたものだが、祖父はやがて哀しい眼をして、首を左右にふってつぶやくのがつねだった。

「信じとらんな……しかし優子、本当なんだよ。いつかおまえにわからせる方法を考えるとしよう」

ホテルを出たわたしはタクシーを拾って海岸へ行く。祖父に会いに行くときはいつも禁じられた恋人とデートする気分になる。車の窓からは潮の匂いが快い。暗い倉庫の並ぶところでわたしはタクシーを停めさせる。こんなところでいいのかとタクシーの運転手はけげんな表情をするけど、わたしは黙ってタクシーを降りる。

祖父のいる倉庫は荒れている。昔は立派な港があったらしいのだが、潮の流れの変化から

か、いまでは倉庫のすぐ近くまで砂がおしよせてきていて、波うちぎわはずっと先、砂丘をいくつも越えてゆかねばならない。港の面影はどこにもない。

遠くに波の音を聞きながらわたしは巨大な倉庫の、裏口の小さなドアに近づく。闇のなか、そこだけにぽつんと温かな灯がともっていて、わたしは心安らぐ。ドアをあけると祖父の住まいだ。倉庫の一部をパネルでしきった一部屋。居間であり台所であり、そして書斎でもある。

祖父は食器や本や原稿の散らばった大きなテーブルから顔をあげてわたしを見た。やさしい微笑。立ちあがって、よくきたなとわたしの手を大きな温かい手で包んで、椅子をすすめてくれる。コーヒーはどうだい？　ありがとう。祖父はコーヒーサーバーをヒートプレートにのせてスイッチを入れる。

「今夜はおかしな時間に。なにがあった」

わたしはバッグをテーブルに投げだして上に目をやる。この部屋には天井がない。暗い倉庫の空間が広がっている。ふっと息を吐いて質素な椅子に腰かける。コーヒーの香りが立つ。

「彼から逃げ出してきたの。彼はいいひとなんだけど。だめなの。わたしってだめな女なんだわ。わかってるのだけれど。どうしても、その気になれない」

わたしは作業机になっているテーブルに、電子機器がのっているのに気づく。いままで見たことのないものだ。

「これはなあに。作家をやめて電気屋さんでもはじめるつもりなの」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com